

うたごよみ

曾於文藝

「題字」

末吉文化協会会員
瀬戸口 淳民氏

俳句

末吉俳句会

溪谷の紡ぐ日月岩煙草

川崎 多恵子

激瀬の岩に生まれて石菖は

原口 サエ子

丘一つ紫の風夏薊

藤武 良子

千草俳句会

高原の水辺や風の花さびた

田之上 千代子

高原の透ける白さや沙羅の花

児玉 タエ子

松籟のすぎし林の蟬しぐれ

川辺 良彩

大隅俳句会

ねむの花オルゴールの音聞こえけり

頴娃 晴美

語りあふ父母のありし日夏座敷

鍋山 美智子

木彫師の器に泛きし布袋草

岩重 みどり

短歌

末吉短歌会

リラの花に集まり初めし蜜蜂の
ひそかな羽音目を閉ちて聞く

草野 ミツ子

「まだ」と「もう」共に使える六十八歳

夕焼け色のグロリオサ咲く

泊 康

梅雨寒の夕べ冷たき猫の耳
いかなる人語留めきたるや

森岡 ちどり

大隅短歌会

同病を励まし合い来し二年を
逝きたる友を夫は送らず

西山 美代子

仕事終え梅雨の晴れまに若者の
操るへりは空高く飛ぶ

渡辺 哲夫

用水路を作りし祖の化身かも
棚田の上を螢飛び交う

米沢 正敬

財部短歌会

憲法は押しつけと言ふ政治家が
民に押しつける解釈改憲

児玉 次雄

七輪の炭火で煮ものせし亡母の
面影偲ぶ朝の厨に

杉村 リカ

牧水の生家の縁にこし降ろす
われ豊かさに包まれてゐる

祝迫 道雄

土砂降りに速度を落としく特急
転ばぬ先の杖を持たねば

井上 澄子

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

日割れ田い 唯一の御馳走あ
俄雨 鈴木 一泉

久振い 御馳走が恵い
年金日 森山 厚香

贅沢な 御馳走続つて
肥えもくつ 桐野 奈世

孫ん子あ 御馳走ちなれば
先き座つ 浜田 一好

大隅薩摩狂句会

分限者も 貧者も無かち
明かい月 神宮司 素水

戦死者ん 悔し涙で
月か霞ん 津留 群志

月の出を 涼台で焼酎と
連のて待つ 太良木 五徳

朝思もつ 起きればまこて
眩り月 新屋 涼子